

漢語「効果」の成立についての考察

——翻訳の影響と造語法を中心に——

鄒 文 君

一 はじめに

1.1 辞書記載

現代日本語においては、漢語「効果」が(1)ある働きかけによって現れるよい結果やききめ、(2)演劇・映画・テレビなどで、聴覚や視覚に訴えて、その場面に情趣や真実味を加えるもの(煙を出したり雪や雨を降らせたり、その他、擬音、照明などをいう)、また、その担当者、との意で常用されている。『新明解国語辞典』では、三四三九語の重要語にも選定されており、日常の言語生活で欠かせない語であることが明らかである。

しかし、『日本国語大辞典』で取り上げられた「効果」用例がいずれも明治時代以降のもの、とりわけ上記の意味(2)の例がいずれも二十世紀以降のものである。比較的古い出典として、一八八六

年に成立した藤林忠良・加太邦憲編『仏和法律字彙』に「EFFECT. Ko ka. Do san 効果、動産」とある。また、『大漢和辞典』や中国語辞典の『漢語大詞典』においても「効果」(效果)の古典出典は明示されていないことから、古典語ではなく、近代に成立した語である可能性が高い。その由来や成立経緯、いかに重要語となっているかについて注目してみたい。

1.2 先行研究

佐藤亨著『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』(二〇〇七)では、「効果」は明治十年代からみられ、それ以前、類義語の「功能」(効能)、「効験」(功験)、和語の「ききめ」があると指摘している。そして、比較的古い用例として、森有礼による明治十二(一八七九)年十月十日東京学士会院例会講演「身体ノ能力」の「固ヨリ博識ノ理学ニ頼ラザレバ能ク効果ヲ致シ得ザルコトナレドモ、」

と取り上げている。

一方、黄河清著『近現代辞源』(二〇一〇)では、「效果」(效果)の近代中国語としての比較的古い出典として、嚴復「論英国憲政兩權未嘗分立」(一九〇六)の「雖然、學者欲明此一哄之民之功分權界、与夫于一国所生之效果、理想繁重、難以猝明。」が取り上げられている。日本語と比べると、中国語においては比較的遅い時代に使われるようになっていことが推測でき、日本語から移入された可能性が浮上する。また、この『近現代辞源』や既出の『漢語大詞典』などの意味記載により、「效果」の意味については日中同様で、日本語由来の可能性が高い。

1.3 研究方法

上記を踏まえれば、「效果」が明治初期に現れた新漢語⁽²⁾で、しかも日本人による漢語の造語、すなわち和製漢語と推測される。新漢語の成立については、幕末・明治以降、洋学の翻訳より生じたものが多いこと、大きく(1) 古典漢語(漢籍語や仏教語など)からの転義(「革命」、「文化」、「文明」など)、(2) 中国語(白話小説語や洋学資料の訳語など)の借用(「電気」、「地球」、「化学」など)、(3) 日本独自の創出(「郵便」、「喜劇」、「美学」など)のように分けられることが、すでに多数の先行研究で指摘されている。前記の『仏和法律字彙』の「EFFEET. 效果」のように、「效果」は日

本語にあらわれていた初期の頃に訳語としても用いられている。そのため、「效果」の成立については、幕末以降の英和辞典や和訳洋書、その他、先行の英華字典などを資料として、洋学の翻訳からの影響を明らかにすべきである。

また、先行研究で指摘されているように、「效果」のあらわれる以前に、類義語「効能」や「効験」などがあり、「效果」の造出の動機を把握するには、それらの類義語と比較する必要がある。そのため、各語構成要素の意味や要素間の関係の分析を行う。したがって、本稿では洋学資料の考察や語構成の分析を通して、漢語「效果」の成立の経緯を徹底的に解明する。

二 「效果」の由来

2.1 漢籍・仏典において

「效果」(效果)の中国古典・仏典の記載状況について、古代漢語語料庫(北京大学中国語言学研究中心 Center for Chinese Linguistics PKU)、漢籍全文資料庫(台湾中央研究院)、大正新脩大藏經テキストデータベース(東京大学大学院人文社会系研究科)などのデータベースを利用して再確認すると、辞書記載の通り、出典が見当たらない。

一方、「功果」という語は、下記のように、仏典においてその記

載が確認でき、宋代以降の古典においても見られている。意味上、「現在、また未来に幸福をもたらすよい行い。または、善行をつんだ報い」を表す仏語「功德」と共通することがわかっている⁽³⁾。

(一) 彼轉輪王、生主藏寶、大富饒財、多有功果。(『起世因本經』・卷二)

(二) 今當略說法、大王且諦聽、受持我所說、見我功果成(『佛所行讚』・卷四)

(三) 明德之功果能若是、不亦善乎？(『朱子語類』・大學四或問上・經一章)

(四) 今日半途而廢、不曾成得功果。(『西遊記』・二十七)

(五) 不修功果、到明日死後、披毛戴角還不起。(『金瓶梅』・七十三)

また、一部の漢文で書かれた日本古典においても「功果」が用いられていることが判明した。中に、「無其功果(その功果なし)」「陰私語」の「功果」は、その意味が比較的現代語の「効果」、「結果」に近い。「功德。報い」の意より転用してきたとみられる。しかし、古典における「功果」の用例自体が数少なく、同じ意の用例がほかに見当たらないことにより、仏語的存在に止まっていると考えられる。一般語彙ではないため、近代語「効果」の成立に影響を与えることに無理がある。

(六) 惟師道種在昔。功果于今。(僧夢巖『早霖集』、応永二十九(一四二二)年頃)

(七) 雖諸一揆相催。国繁愚僧相談廻計策。無其功果。(僧

松陰『松陰私語』、永正六(一五〇九)年)

2.2 『万法精理』において

前記の先行研究によると、「効果」が明治十年代からみられるとされているが、今回の考察では明治十年代以前の用例も発見されている。明治八(一八七五)年に成立した翻訳書『万法精理』において「効果」が語として題名から内容まで一般的に用いられていることが判明した。

『万法精理』は、一七四八年に出版されたフランスの啓蒙思想家モンテスキューの著書『法の精神』(仏: *De l'Esprit des lois*) の英訳本⁽⁴⁾に対する和訳である。著者の何礼之(一八四〇～一九二二)は長崎唐通事の出身で、のちに英学も学び、明治元(一八六八)年に開成所御用掛となり、四年に岩倉遣外使節団に随行した経験がある。帰国後、明治政府に出仕し、翻訳事務に携わる。『万法精理』は彼の代表的な訳書でもある。

(八) (題名) 政府ノ元氣ノ善悪ニヨリ生スル處ノ効果ヲ論ス(『万法精理』・巻八・第十一回)

Natural effects of the goodness and corruption of the principles of government. (Translated from the French of Montesquieu: The spirit of laws, 4th ed.

Edinburgh)

- (九) (題名) 英國ノ風土ヨリ所生ノ効果 (『万法精理』・卷十四・第十三回)

Effects arising from the Climate of England (ibid.)

- (一〇) (題名) 風土ノ其他ノ効果 (『万法精理』・卷十四・第十四回)

Other Effects of the Climate. (ibid.)

- (一一) (題名) 亞細亞北部ノ人民ト歐羅巴北部ノ人民トハ齊シク其南部ヲ征服セシモノト雖モ其効果ハ甚タ相反スルロトヲ論ス (『万法精理』・卷十七・第五回)

That, When the People In the North of Asia and Those of the North of Europe Made Conquests, the Effects of the Conquest Were Not the Same. (ibid.)

- (一二) (題名) 新タニ邦土ノ肥瘠ヨリ生スル所ノ効果 (『万法精理』・卷十八・第四回)

New Effects of the Barrenness and Fertility of Countries. (ibid.)

- (一三) (題名) 交遊ヲ好ム氣質ノ效果 (『万法精理』・卷十九・第八回)

Effects of a Sociable Temper. (ibid.)

- (一四) 或人ノ論ニ曰ク「吾人仰テ視俯シテ察スルニ覆載間萬有ノ効果アル皆造化無心ノ氣數ニ出テサルハナシ」嗚

呼妄ナリト云フ可シ (『万法精理』・卷一・第一回)

They who assert, that a blind fatality produced the various effects we behold in this world, talk very absurdly; (ibid.)

- (一五) 若シ君主此特權ヲ施用スルニ方ヲ謹慎明察ニシテ濫妄ノ「絶テナキ時ハ著シキ効果ヲ生シ得ベシ (『万法精理』・卷六・第十七回)

This power which the prince has of pardoning, exercised with prudence, is capable of producing admirable effects. (ibid.)

- (一六) 之ニ反シテ元氣強壯ナル時ハ法律ノ至悪ナルモノモ其効果ハ更ニ至善ナルモノニ異ナラス (『万法精理』・卷八・第十一回)

but, when the principles are sound, even bad laws have the same effect as good; (ibid.)

『万法精理』の英語原著⁽⁹⁾で確認すると、「効果」(效果)は、主に英語「effect (s)」の対訳語として用いられていることが判明した。ただし、『万法精理』においては、「effect (s)」の訳語として、「効果」(效果)のほかに、「効験」(効験)や「効用」が使われていることもみられる。

- (一七) (題名) 古今教育ノ效験各異ナル事 (『万法精理』・卷四・第四回)

Difference Between the Effects of Ancient and Modern Education. (ibid.)

(一八) 羅馬ノ監察官ヲ置キシヤ時トシテハ：驚クヘキ効驗ヲ

得シハ吾人ノ能ク知ル所ナリ (『万法精理』・卷八・十

四)

Every one knows the wonderful effects of the censorship among the Romans. (ibid.)

(一九) 乃チ羅西敦人の嫉妬ヲ和シテ其効用ナカラシメ、(『万

法精理』・卷十・十四)

he rendered the jealousy of the Lacedaemonians of no effect: (ibid.)

当するのである。なお、同書では「consequence」の訳語に「結果」も用いられている。

(二〇) 一切法律ヲ制定シ能ハサルハ必至ノ効果ナリ (『民法

論綱』卷一・第三回)

by a necessary train of consequences, all legislation would be rendered impossible. (Jeremy Bentham, Principles of the Civil Code)

(二二) 財富ノ部分ノ康福上ニ於テ効果ヲ判定セント欲スルニ

ハ、先ツ其境遇ヲ三等ニ分チ、各其異ナル處ニ就テ之ヲ論スヘシ (『民法論綱』卷一・)

In order to judge of the effect of a portion of wealth upon happiness, it must be considered in three different states. (ibid.)

(二二) 是レ眼前ノ結果ニシテ數ノ最モ知り易キモノナリ、洵

トニ然ラハ社會ノ百事直ニ土崩瓦解ノ勢ヲ為シ (『民法論綱』卷一・第三回)

the certain and immediate consequence would be, that there would soon be nothing more to divide. Every thing would be speedily destroyed. (ibid.)

2.3 『万法精理』前後

『米国律例』一名通報撮要』(一八七二)、『政治略原』(一八七三)、『世渡の杖』一名経済便蒙』(一八七四)などの『万法精理』以前の何礼之の訳書においては、「効果」の用例が見当たらなかった。

それによって、『万法精理』より使われるようになってきている可能性がある。

一方、それ以降の何礼之の訳書では、翌年(一八七六年)に成立した『民法論綱』を例として、「効果」が引き続き使用されている。その英語原書⁶⁾によると、「effect」「consequence (s)」の訳語に該

2.4 「effect」のエッセンス

上記によって、「効果」は、明治初期より英語「effect」などの訳語として用いられていることが明らかである。「effect」および

「consequence」の和訳について、幕末・明治時代の代表的な英和辞典において確認すると、以下のように、「効果」が見当たらないことが判明した。それに対して、類義語の「効験」が「effect」の訳語として『英和対訳袖珍辞書』の時代より収録されており、『和訳英辞書』や『附音挿図英和字彙』などにおいては「シルシ」と附音されている。ほかに、『和英語林集成』第三版の「effect」の訳語に「konô」(功能)が増補されたことが注目される。

- (一一三) Effect, s. 効験、功績、続き、事ノ次第、終リ
Consequence, s. 關係、続き、感通、肝要、大切(『英和対訳袖珍辞書』、一八六一)
- (一一四) EFFECT, v. Togeru; jōju szru; dekuru.
CONSEQUENCE, Ato; daiji; taiseisz. (『和英語林集成』初版、一八六七)
- (一二五) Effect, s. 効験(シルシ)、功績(イサヲシ)、続(ツ)、キ(事ノ次第)終(ヲワ)リ、業(ワザ)、實(ジツ)
Consequence, s. 關係(クワンケイ)、続キ、感通(カンツウ)、肝要(カンヨウ) (『和訳英辞書(薩摩辞

書)』、一八六九)

- (一二六) EFFECT, n. Sei, yue, waza, shoi; kiki, shirushi.
CONSEQUENCE, n. Yue. (『和英語林集成』再版、一八七二)

(一二七) Effect, n. 成就(ジャウジュ)、功績(イサホシ)、成果(ナリハテ)、効験(シルシ)、關係(クワンケイ)、利益(リエキ)、意思(オモヒ)、事實(ジツツ)
Consequence, n. 關係(クワンケイ)、効験(シルシ)、結局(ツママリ)、迹(アト)、緊要(キンヨウ)、利益(リエキ)、感動(カンドウ) (『附音挿図英和字彙』、一八七三)

- (一二八) Effect 結果、應報、効験、果報
Consequence 干係、後件、餘波、影響 (『哲学字彙』、一八八一)
- (一二九) EFFECT, n. Sei, yue, waza, shoi; kiki, shirushi, kekwa, konô, dekibai.
CONSEQUENCE, n. Yue, eikyō, kekwa, kwankei. (『改訂増補和英英和語林集成』(第三版)、一八八六)

(一三〇) Effect, n. 成就(ジャウジュ)、功績(イサホシ)、成果(ナリハテ)、効験(シルシ)、關係(クワンケイ)、利益(リエキ)、意思(オモヒ)、事實(ジツツ)
Consequence, n. 關係(クワンケイ)、効験(シルシ)、

結局(ツツマリ)、迹(アト)、緊要(キンヨウ)、利益(リエキ)、感動(カンドウ)、餘波(ヨハ)、影響(エイキョ)、後件(『増補訂正函解英和字彙』、一八七七)

(三十一) Effect. n. 果、結果、効驗、應驗、感覺、感動；力、勢…主意

Consequence. n. 結果、効驗、後事、後件、餘事、餘波、影響；〔論〕推斷；關係、因果。(『附音插图和訳英字彙』、一八八八)

また、「効果」(效果)の英和辞典登録については、大正以降の『井上英和大辞典』が比較的早かった。その時代、「効果」が日本語に現れて以来、四十年も過ぎたのである。

(三十二) effect. n. ①結果、成果、效果。②有効、ききめ、效力、効驗、實效、效能。③外觀、外見、見映(ミバエ)、映〔ハエ〕。④畫面効果。⑤ [pl.] 動産、財産、所有品。⑥観者、聴者等に興へる印象、人に及ぼす感動。⑦主旨、趣意、意味。⑧実行、遂行、成就。⑨事實、實際。(『井上英和大辞典』、一九一五)

さらに、日本の英字に影響を与えた十九世紀の英華字典の記載を確認すると、すでに『モリソン英華字典』の時代には「因果の果」と、『メドハースト英華字典』の時代には「結果」、「効驗」と訳されていることが判明したが、依然として「効果」が見当たらない。

い。それによって、「効果」については、英華字典などの中国語訳語由来の可能性が低いことに対して、和製漢語説が有力である。

(三十三) EFFECT, consequence and a cause. 因果。Unpleasant effects; serious consequences. 有關係(『モリソン英華字典』、一八二二)

(三十四) EFFECT, that which is produced by a cause. 結果。因果。result, 効驗、靈驗、實、consequences, 關係(『メドハースト英華字典』、一八四七～四八)

(三十五) Effect, that which is produced by an agent or cause. result, 果、果實、靈效、靈驗、効驗、應驗、徵驗。cause and effect, 因果。consequence, 關係。(『ロブシャイド英華字典』、一八六九)

なお、英華字典における「効果」の古い収録として、二十世紀以降の『顔惠慶』英華大辞典』が取り上げられている。下記のように、「consequence」や「energy」の訳語に「効果」があり、「effect」の訳語に語順を変えた「果效」がみられる。二十世紀の英華辞典は日本の英和辞書を参照するようになることが指摘されているが、「効果」の収録については日本の英和辞書よりも先行している。

(三十六) Consequence, n. 3. That which follows. 果。結果：effect, 効驗；as, reckless of consequence, 不顧效果；Energy, n. 2. Power exerted. 奮力；vigorous operation, 強力；efficacy, 效果, 功力；

Effect, n. 1. That which is produced by an agent or cause. 果, 功效, 結果 : consequence. 果効 : as, cause and effect. 因果 : chemical effect. 化學功效 : (「顔惠慶」英華大辭典、一九〇八)

2.5 「効・果効」の「effet」

一八八〇年代初頭に、フランス民法の解説書である『佛國民法覆義』を代表として、「効果」の反転語にあたる「果効」の使用がみられる(両者の関係については後述する)。出典では、以下のポイントが示されている。

(三七) 約束ノ果効(エフェー)ハ即チ或ハ義務ヲ醸生シ或ハ義務ヲ消滅シ或ハ義務ヲ更改シ或ハ所有權ヲ移轉スル等是ナリ 義務ノ果効ハ其義務アルヲ以テ發生セシムル法律上ノ結果ナリ (黒川誠一郎訳)『佛國民法覆義』第二巻・第三卷・第三章、一八八二)

まず、「義務ノ」果効の意味について、「其義務アルヲ以テ發生セシムル法律上ノ」結果」としている。その「結果」の意、および「効果・果効」の成立に与えた影響については、次節で詳論する。次に、付けられたルビ(「エフェー」)によると、フランス語「effet」の訳語であり、前掲の『仏和法律字彙』の記載と合致している。そして、第三章の題名「義務ノ果効」について、「法典ノ此章ニ於テ

登録スル者ハ則チ義務ノ効及ヒ約束ノ効ナリ」⁽⁸⁾、「今其語用ノ穩當ヲ期スル時ハ義務及ヒ約束ノ果効ト謂フ可シ」とあり、「果効」は民法典の「効」に相当することが示されている。一方、同じフランス民法の解説書として、先行の『佛國民法覆義』(一八七五)では、「effet (「エフヘー」)を「効(シルシ)」としているのが確認された。「効」と「果効」は、「effet」の新旧訳語に該当することが明らかである。

(三八) 法典ノ此章ニ於テ登録スル者ハ則チ義務ノ効及ヒ約束ノ効ナリ。故ニ章題ニ義務ノ果効ト有ルハ全ク過誤ニシテ今其語用ノ穩當ヲ期スル時ハ義務及ヒ約束ノ果効ト謂フ可シ。(黒川誠一郎訳)『佛國民法覆義』第二巻・第三卷・第三章、一八八二)

(三九) 第二款 失踪者ニ属ス事アル可キ權利ニ付テ、失踪ノ効(シルシ)。効(エフヘー) ソレヲ本トシテ生シタルヲ云フ (中金正衡・桜井精)『仏蘭西法律民法略解』卷之一、一八七五)

なお、それ以降、フランス法律関係の訳書においては、「effet」を「効果」としているのが一般的となっている。

(四〇) (題名) 責任ノ効果ニ関シテ前數章ニ論定シタル所ノ結局ヲ論ス (大塚成吉訳)『宰相責任論』・十三、一八八三)

Résultats des Dispositions précédentes, relativement aux effets de la Responsabilité (Benjamin Constant,

De la responsabilité des ministres, Chapitre XIII, 1815.)

(四一) (第三百十三項) 民法第一千三百八十四條ニ於テ、責任

ノ效果一定セリ、… (『仏国損害賠償法原義』下編・

一・四「責任ノ效果」一八八三)

L'article 1384 détermine l'effet de la responsabilité:...

(François Laurent, Principes de droit civil français,

Vol 20, Titre IV, Chapitre III, Section I, IV, Effet de la

responsabilité, 1878.)

「effet」のいふは、M. Nugent の仏英辞典⁽⁵⁾には「Effet, effect」

「Effect, effect」とあり、英語「effect」に該当することが明白である。

「effect」を「効果」「果効」としているのは、先行した「effect」

の和訳「効果」を参考としたためと考えられる。

2.6 普及と定着

一八八〇年代では、「効果」は、法律関係のほかに、さまざまな分野に登場し普及している。その上、訳書に限らず一般の著作においても使用されるようになっていく。

(四二) 語ヲ易ヘテ之ヲ言ヘハ契約ノ効果ハ契約者雙方ノ者ニ

止マルト謂フヘキナリ、(合川正道述)『英米契約法

講義』・五「契約ノ効果ヲ受クル者」、一八八三)

(四三) (題名) 証ノ提出、及効果 (岸小三郎訳)『斯丁文氏

英國證據法』三、一八八四)

Production and effect of evidence. (James F. Stephen,

A digest of the law of evidence, Part III, 1878.)

(四四) (題名) 液体上ニ於ケル重力及び壓力ノ效果 (櫻井房

記訳)『小物理學書』卷一・二、一八八五)

(四五) 之ヲ要スルニ神ヲ以テ純一無對ノ靈物ト為スハ蓋シ原

因効果ノ二語ニ係リ意義ヲ混淆シテ分別スルヲ無キ由

リテ然リ (中江兆民)『理學鉤玄』、一八八六)

(四六) (題名) 筋肉系統ニ於ル体操ノ効果ヲ論ズ (星野久成)

『体操原理』・七、一八八七)

そして、一八九〇年代には、新聞記事や雑誌にも現れている。新聞記事では、「かうくわ」のような音読を示すルビが振られたのが確認された。また、表記については、「効果」が一般的で、ほかに「好果」や「功果」も見られる。従来の仏語を意識している可能性があるものの、新漢語であるため、その表記がまだ完全に定着していなかったとみられる。

(四七) 文學の效果ハ之を速時に見る能はず、(社説) 文學

と貴族富豪及び宗教家、「朝日新聞」一八九二年八月

九日朝刊)

(四八) 新官制ハ好果(かうくわ)を生・べきや(読売新聞)

一八九一年七月十三日朝刊)

(四九) (題名) 風俗取締の効果(かうくわ) 如何(『読売新聞』

一八九一年七月二十六日朝刊)

(五〇) 誰れか農業改良を以て効果多からずとなすか、但だ其

効果の或は顯著ならざるがゆゑ、人往々之れに注意せ

ざるのみ、其効果の顯著ならざるにあらず、(『矢部規

矩治』「農業」、雑誌『太陽』一八九五年〇一号)

(五一) すぐに薬にのみ因らず、左の法に従はゞ一二ヶ月の後

必ず効果あり。(『修美生』「容儀雜則」、雑誌『太陽』

一八九五年〇三号)

(五二) 本會の功果は東京大阪横濱神戸長崎函館に本所及出張

所を置き年々幾千百の海員を擔保を以て各船に媒介し

又は寄宿所講習所を設て彼等を養成し且船長運轉手機

關手を教授して數百名を受験及第せしめたり其詳細の

數字は本會歴年の報告に照して明瞭なり(『社交案内』、

雑誌『太陽』一八九五年〇七号)

なお、近代的国語辞典における「効果」の登録については、『辞

林』(二九〇七)が比較的早かった。「効果」は、日本語として二十

世紀初頭に完全に定着したとみられる。

(五三) かう・くわ 「効果」(名) ㊦できあがり。・あげ。

㊧き、め。・るし。㊨てがら。いさを。『辞林』、一

九〇七)

三 「効果」の造語

3.1 時代背景

漢語「効果」は、明治初期に「effect」などの西洋概念に当てるために新しく造出されたものであることが明白である。成立の明治時代は、日本語における漢語が急増した時代であることが知られている。例えば、幕末の『英和对訳袖珍辞書』、『和英語林集成』初版に比べ、わずか二〇年後に出た『附音插図和訳英字彙』では、和語と漢語の比率が逆転していて、そして、漢語のうち、旧漢語より新漢語の方が多くなっている¹⁰。明治に入って、西洋由来の新概念に当てるには、古臭い言葉より新時代にふさわしい新語の方が好まれてくる。それは、「効果」のような新漢語の急増の原因でもある。

また、新漢語の成立については、前記で古典語の転用、近代中国語の借用、造語に分類されたと言及して、[effect]の訳語として「効果」の前にあった「効験」や「結果」は、転用、借用の造語法に該当する。その上で新造された「効果」については、その造語理由の解明が求められている。

3.2 語素「効」と「果」

「効」(效)については、『説文解字』には「象(かたどる)也」とあり、『広韻』には「具(そなふ)也、學(ならふ)也、象(かたどる)也、又効力、効驗也」とあり、原義は動詞で手本に従いなう意である。のちに、「かたどる」の意より「あらわす」の意が生じてきて、「しるす」の意を表す「驗」と類義語となっており、「しるし。効驗」の意として名詞にも用いられている。そして、「いたす。つとむ」の意より「はたらき」の意が生じてきて、「功」と類義関係も成立している。日本の古字書『類聚名義抄』においては、動詞の「ナラフ、シルス、イタス」など、名詞の「シルシ」との訓が収録されている。⁽¹¹⁾『日本国語大辞典』によると、漢語「効」を除き、語素「効」による造語は、近代以前には、「効驗」、「効能」、「神効」などが使用されている。

一方、「果」は、原義が「このみ。果实」で名詞であり、派生の用法に動詞の「はたす」と、「果敢」や「果斷」のような「思い切つて物事を行なうさま」の意を表すのがある。仏教の世界では、「善悪の報い」や「仏教の真理を悟ること。悟りの境地。」などの仏教の意味が生じており、「因果」や「果報」などの仏語は、一般世俗にも知られている。「果敢」や「果斷」などを除き、造語成分として実在または抽象的な「果实」を表すのが基本的である。

3.3 「効驗」と「効能」について

「効驗」は、「ある物事の結果が現われること。ききめ。しるし」の意として平安時代より日本語で使用されている。⁽¹²⁾『文明本節用集』、十九世紀以降に成立した『増廣字便倭節用集悉改大全』においては「効驗 かうけん」と収録していて、漢字の「効」と「驗」には両方とも「シルシ」と訓注している。漢語「効驗」は、「シルシ」の意を表す類義語素「効」と「驗」の結合とされている。

そして、前掲の通り、『附音挿図英和字彙』などの英和辞典においては、「効驗」自体にも「シルシ」のルビが付けられている。ほかに、明治初期に成立した中村正直訳『西国立志編』においても、以下のように、「シルシ」と注釈されているのがほとんどである。⁽¹³⁾英語原書によると、基本的に「result」の訳語に該当する。⁽¹⁴⁾

(五四) 英國ノ勢力、日ニ長スルヲ首トシテ、人民ニ自主ノ權アリテ、又能ク勉強スルノ効驗(シルシ)ナリ、(『西国立志編』二・一、一八七二)

This vigorous growth of the nation has been mainly the result of the free energy of individuals (Samuel Smiles, Self-Help: with Illustrations of Character, Conduct and Perseverance)

(五五) 甲ノ能スル人ノ方法ヲ用ナバ、乙モコレト同シキ効驗

(シルシ)ヲ得ベシ、(『西国立志編』十・四、一八七一)

1) Employ the same means, and the same results will follow. (ibid.)

(五六) 凡ソ事原因アレバ、必ズソノ效驗(シルシ)アリ、故ニ人民ノ品行ハ、邦國百事ノ原因ナレバ、ソノ品行ノ善惡ニ隨ヒテ、ソノ善惡ノ效驗ヲ邦國ノ景象ニ發スル「ナリ、(『西国立志編』十三・一、一八七一)

And as effect finds its cause, so surely does quality of character amongst a people produce its befitting results. (ibid.)

(五七) 然・反復積累スルトキハ、重要ナルモノト成ルナリ、恰モ零碎ノ光陰ノ如ク、又毎日ニ積ル一小錢ニ似タリ、十二箇月ノ末、或ハ一生ノ終ニ至ハ、驚ベキ大数トナリ、重大ノ效驗(シルシ)ヲ見スナリ、(『西国立志編』十三・十七、一八七一)

They are like the spare minutes, or the great a day, which proverbially produce such momentous results in the course of a twelvemonth, or in a lifetime. (ibid.)

一方、「功能」については、語素として「功」も「能」も「力」の意を持っており、前者は「現実的なはたらき、努力」、後者は「潜在的な能力、才能」としている。上記の「効驗」と同様に、類義語

素の結合によって構成されてものである。日本語においては、平安時代より使用されており、そのほか、前掲の通り、仏語(「功能(くろう)」)として「結果を生じさせるはたらき」との意より転じて「果報を生む善行」や「功德」を表す場合もある。その影響か、ほとんどプラスの意味で用いられている。また、前記の通り、「効」とは類義で、発音も相似しているため、「功能」と「効能」のように表記を「功」から「効」に置き換える場合がある。さらに、「功」と「効」の類義結合によって「功効」という漢語が存在している。

また、『西国立志編』には、下記のように、「功効」の用例があり、「効驗」と同様に「result」の訳語としている。しかし、そのルビは、一般の訓読ではなく、音読の「コウノウ(効能・功能)」となっている。当時では、「功効」、「効驗」より「功能」(効能)の方が知られていると推測される。実際に、『西国立志編』には、(五九)のような、ルビが付いていない「効能」の例がある。そのほか、『和英語林集成』では、初版から「功能」を収録していて、英語訳に「virtue、efficacy、power (only of medicine.)」とある。

(五八) 譬バ玻璃鏡ニ顯ハル、畫影ノ種々ニ變動流移スルガ如ク、ツヒニ著落セル實形トナリテ、永續スル功效(コウノウ)ハ、アラザルナリ、(『西国立志編』一・四、一八七一)

...have as little practical and lasting result as the shifting of the figures in a phantasmagoria. (ibid.)

(五九) コノ赤水ハ、極純潔ノ心ヲ以テ用ヒサレバ、効能アラ

ズトゾアリケル (『西国立志編』三・三、一八七一)

…to succeed with the process, it was necessary that
the fluid should be used "in great purity of heart;"

3.4 「効果」の語構成

上記によれば、語素「効」による漢語「効験」、「効能」(功能)、「効効」の語構成については、いずれも並列関係であり、「効」は、「はたらき」によって結果が現われること。しるし。ききめ」の意とされている。一方、「効果」については、語素の「果」は、文字通り「物事の結果」として、「効」とは上記の漢語の語素のようなはっきりした類義関係ではなからうが、両者とも「結果」と関わる抽象的な意味としている。

前掲の通り、「effect」の訳語の中に、語素「効」による「効験」、語素「果」による「結果、成果」があり、「効」と「果」は、単独で「effect」(または「effect」)に当てることができる、いわゆる「effect」の意味を持っている。それによって、「効果」の語構成については、語素「効」と「果」が並列関係であると考えられる。陳(二〇〇一)などの先行研究では、このような類の構造については、概念の抽出による一種の凝縮表現とも捉えられ、その結合の時代が比較的新しく、産出量も多く、結合範囲もより広いと指摘している。同じよう

な構造を持つものとして、「理由」という語が挙げられる。「reason」の訳語として導入された「理由」は、語構成要素の「理」と「由」がそれぞれ「reason」の意味要素にあたる「principle (道理・原則)」と「cause (原因・縁由)」を表すものであり、両者は修飾・被修飾あるいは構文的な関係ではなく、上記の「効」、「果」と同様に並列関係なのである。

また、前記では「効果」の反転語「果効」について言及されたが、同じ「effect」の訳語として、「効果」も「果効」も用いられたのは、同じ類義語素「効」と「果」の並列による造語で、語素の反転による意味的变化が生じにくいからであろう。

3.5 造語の理由

新漢語「効果」の造語理由を解明するには、当時既存の類義語「効験」や「効能」との差異を明らかにすべきである。上記により、「効果」は、「effect」の訳語として、「効験」や「効能」と同様に並列関係の語構成であり、そして語素「効」が共通しているため、その差異は語素「果」より生じてくるのである。

前記の通り、「cause and effect (因果)」の「effect」(『モリソン英華字典』)「that which is produced by a cause (ある原因によって生じる結果)」(『メドハースト英華字典』)が「effect」の基本的な意味で、「効(功)」、「験」、「能」に比べ、「結果」の意を表す語

素「果」の方が、その本義を反映することができる。それにより、「effect」の造語については、「結果」の意を表現しようとするのがその最大の要因で、明治以降、「原因」、「結果」、「および」「因果関係」の概念の普及がその遠因とみられる。

3.6 「結果」、「成果」との使い分け

日本語における「効果」、「結果」、「成果」は、由来や造語法がそれぞれ異なっているのだが、⁽¹⁶⁾いずれも「effect」や「result」などの訳語として近代に成立した漢語、いわゆる新漢語で、原因・結果を示すものである。まず、「結果」の意味については、「効果」が登録された近代的国語辞典『辞林』に「或原因が或所縁に催（モヨホ）されて、發生若しくは到達したる状態又は終極。なりあがり。はて。でき。」とあり、「効果」の「きあがり、しあげ」と共通しているが、語素「効」による「ききめ、しるし」、「てがら、いさを」の意はない。それを以て、両者を区別することができる。

そして、「結果」が基本的に単なる結果をさすことに対して、「効果」は、「望ましい結果」、「よい結果」を表すのである。実際に、日本語にあらわれた当初、前掲の「原因効果」などのように、単なる「結果」としているのが多く見られたのであるが、プラスの意味に片寄るようになったのは、「ききめ、しるし」を表す「効」が影響を与えているほかに、「結果」の定着によって、「効果」の単なる

結果の意味を担う必要性が低下しているからである。

また、「結果」を語基とした「好結果」という造語があり、文字通り「好い結果、好ましい結果」の意とするものである。そのことにより、「結果」が単なる結果の意であることを示している。また、前掲でもあらわれている「好果」という語があり、「好結果」と同様に「好い結果」の意とし、「効果」とは同音類義語とも言える。『日本国語大辞典』の用例を確認した限り、一八七〇年代後期にすでにあらわれており、「効果」に由来した可能性もあるのだろう。

(六〇) 危険を冒して遂に非常の好結果（カウケックワ）を得てより、又船を買ひ増し人を僦（やと）ひ（幸田露伴）『露団々』、一八八九

(六一) 苟も保守の精神なき時は、縦ひ如何なる善美の改良政治にても、之を保維して其好果を受用する事能はざる者なり（福地桜痴）『漸進主義』、一八七九

(六二) 之れを改革するに当て仮令ひ奇計を用うとも好果を得んこと疑ひなし（矢野龍溪）『経国美談』前・一五、一八八三―八四

一方、漢語「成果」は、「効果」と同様によい結果の意を表すもので、「効果」に対しては、「結果」以上の類義的存在とされている。⁽¹⁷⁾また、「成果」は、『モリソン英華字典』に「the result in a future state is the 成果 formation of the fruit」とあり、『附音挿図英和字彙』や『哲学字彙』には「Product 成果」とある。また、「果実」や

「成果物」⁽¹⁹⁾の意となっており、実物をさしている。それに対して、「効果」は、抽象的な「結果」、いわゆる「影響」をさすのが基本的である。これは両者の最大の相違点とも言えるだろう。

なお、「効果」は、さらに「(演劇、映画、テレビなどにおける)演出効果」という独自の意味を持っている。前掲の『井上英和大辞典』に「effect、観者、聴者等に興へる印象、人に及ぼす感動」とあり、「effect」に由来したものと考えられる。日本語においては、二十世紀以降に普及していったのである。

(六三) 新語「舞台効果(ブタイカウクワ) 脚本を舞台にのせた上の効果」(大町桂月・高木斐川)『和漢大辞典』、一九一九)

(六四) 歌舞伎芝居の舞臺的效果(高洲豊水)『東京商品界』第一卷、一九二二)

(六五) 二月二十一日 電燈照明の色彩的効果(竹内正男)『三百六十五日の商略』上巻、一九二三)

四 おわりに

このように、上記の考察によって、漢語「効果」の成立について、以下のようなことが判明した。

「効果」は、漢籍や仏典に出典のない、近代に成立した漢語であり、一八七〇年代に『方法精理』を代表とした法律関係の和訳洋書

において英語「effect」などの翻訳にあたり導入されたものである。「effect」の「that which is produced by a cause (ある原因によって生じたる結果)」との本義、および「cause (原因)」との関係(因果関係)を表現するために、「結果」の意を表す語素「果」と従来「効験」などの訳語を表すことのできる語素「効」を並列関係で結合させ、新しい訳語として造出された。のちに、「結果」が(単なる)「結果」の意を表す漢語として定着したことによって、「効果」は、主として「ある働きかけによって現れる結果。ききめ。しるし」の意を表すようになっており、基本的に「望ましい結果。好い結果」を表し、「結果」と区別されている。二十世紀以降、『辞林』の登録を代表として日本語として完全に定着したとみられる。さらに、「effect」の影響により、「演出効果」の意で用いられるようになり、今日に至っては、言語生活上の重要な語となって常用されている。

なお、「効果」のような、対象概念の意味要素を表す語素の結合による翻訳造語のほかの個体の収集や、「効果」の「効果」、「好果」との関係の解明などの課題はまだ残っており、それをめぐって、今後更なる研究を展開していきたい。

注

(1) 『新明解国語辞典』・「あとがき」・「重要語」参照。

(2) 幕末・明治以降、西洋の文物や概念の大量移入に伴って、日本語において急激に増加した漢語をさす。それ以前に日本の古

典や仏典仏書に用いられた「旧漢語」に対していう。

- (3) 『大正新脩大藏經』第四冊(本縁部下)第一九二号(『仏所行讃』三八ページ)の脚注十五により、「受持我所説 見我功果成」の「功果」(高麗版底本)が、校合の対象となった宋・元・明のそれぞれの時代に印刷された三つの木版大藏経では、「功德」となっている。

- (4) 『万法精理』・凡例に「今重譯スル所ノ書ハ即チ佛書ヲ英文ニ翻譯シテルモニテ千七百六十八年蘇格蘭ノ都府伊丁堡ニ於テ刊行セル第四章版(The spirit of laws: translated from the French of M. de Secondat. Baron de Montesquieu. Volume I. The Fourth Edition. Edinburgh 1868)ノ古本ニ係ル」とある。

- (5) The spirit of laws: Charles Louis de Secondat. Baron de Montesquieu. The Complete Works of M. de Montesquieu. In Four Volumes. Volume the First. London 1777. 使用。

- (6) 本稿では Principles of the Civil Code: Jeremy Bentham. The Works of Jeremy Bentham. vol. 1. Edinburgh (1838-1843) を参照した。

- (7) 陳力衛(二〇一三)「英華辞典と英和辞典との相互影響—20世紀以降の英和辞書による中国語への語彙浸透を中心に—」。陳(二〇一七)の指摘より。

- (8) フランス民法典第三卷第三章の題名については、一八七五に文部省によって出版された『仏蘭西法律書：民法』には「契約ノ義務ノ効」とあり、一八八六に博聞社によって出版された『仏蘭西法律書増訂上：憲法 民法』には「義務ノ効」とある。

- (9) Nugent's pocket dictionary of the French and English languages. 一八七一年に成立した岡田好樹訳『官許 仏和辞

典』がこの仏英辞書の一八六二版からの翻訳である。本稿では一八四七年版を参照としている。

- (10) 『英和对訳袖珍辞書』(堀)：和語六三・五%、漢語三六・五%；旧漢語七二・四%、新漢語二七・六%、『和英語林集成』初版(ヘボン)：和語七三・〇%、漢語二七・〇%；旧漢語八九・一%、新漢語一〇・九%、『附音挿図和訳英字彙』(島田)：和語二八・二%、漢語七一・八%；旧漢語四五・三%、新漢語五四・七%。森岡健二(一九六九)『近代語の成立—語彙編—』第八章。森岡健二『改訂近代語の成立—語彙編—』(明治書院、一九九一)による。

- (11) 『字通』(平凡社、一九九六)参照。

- (12) 「頗雖驚目、於事有効驗、拳達如件」。(『貴嶺問答』、一一八五〜九〇頃)

- (13) 「コレ皆許多ノ人ノ勉力智思ニ由リテ現出セル結果(ミノリ)效驗(テキバビ)ナリ」(『西国立志編』二・五)では、「テキバビ」と訓注している。

- (14) Samuel Smiles, Self-Help: with Illustrations of Character, Conduct and Perseverance. 1867. 本稿では Samuel Smiles, Self-Help: with Illustrations of Character, Conduct and Perseverance, New York, 1871. を参照した。

- (15) 「欣然トシテ楽メル人ハ、事ヲ為スニ力アリテ、必ズソノ効驗ヲ見ルベシ」(The most effective work, also, is usually the full-hearted work that which passes through the hands or the head of him whose heart is glad.) (『西国立志編』十二・十八) 以下「effective work」の訳語に該当する。

- (16) 「結果」は、中国の白話小説や英華字典に出自があり、中国

語の借用に該当する。「成果」は、『モリソン英華字典』に
「PREDESTINED and the result in a future state is the 成果
formation of the fruit」とあり、そして、『道訳法児馬(長崎
ハルマ)』(一八一六～三三)に「Utslag. 成り果」と、『英和
対訳袖珍辞書』に「Issue 成り果」や「result 成果」とあり、
中国語の借用か、和語の音読による造語とみられる。

(17) 最初の国語辞典登録として、金田一京助『明解国語辞典』に
は「できあがった結果」とあり、現代では、『日本国語大辞典』
には「なした結果。できばえ」とあり、『大辞林』第三版に
は「なした結果。できあがったよい結果」とあり、『新明
解国語辞典』第六版には「その目的、よい結果」とある。

(18) 『分類語彙表』増補改訂版(二〇〇四)・「1112 因果」参
照。

(19) 「燃焼ノ成果物(Product of combustion)」(水谷叔彦)『軍
艦機関計画一斑』巻ノ四、一八九九)

参考文献

- 黄河清 『近現代辞源』、上海辞書出版社、二〇一〇
佐藤亨 『幕末・明治初期 漢語辞典』、明治書院、二〇〇七
陳力衛 「なぜ日本語の「気管支炎」から中国語の「支気管炎」
へ変わったのか」、『日中語彙研究』第六号、愛知大学中日大辞
典編纂所、二〇一七
—— 『和製漢語の形成とその展開』、汲古書院、二〇〇一
日本国語大辞典第二版編集委員会 『日本国語大辞典 第二版』、小
学館、二〇〇二
森岡健二 『改訂近代語の成立 語彙編』、明治書院、一九九一

デジタルアーカイブ&データベース

朝日新聞記事データベース 聞蔵Ⅱビジュアル <http://database.asahi.com/index.shtml> 朝日新聞 二〇一七年六月参照

英和対訳袖珍辞書デジタルアーカイブ http://library.rikkyo.ac.jp/digitalibrary/shuchinjisho/contents/con_01.html 立教大学 二〇一七年六月参照

近代數位資料庫 (Modern History Databases) 英華字典資料庫
<http://mhdbm.h.sinica.edu.tw/dictionary/enter.php>、台湾中央
研究院、二〇一七年六月参照

古典籍総合データベース <http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/index.html> 早稲田大学図書館 二〇一七年六月参照

国立国会図書館デジタルコレクション <http://dlndl.go.jp/> 国立
国会図書館、二〇一七年六月参照

語料庫在線 古代漢語語料庫 <http://www.cncorpus.org/ACindex.aspx> 中国教育部语言文字应用研究所、二〇一七年六月参照

ジャパンナレッジ Lib <http://japanknowledge.com/library/> ジャ
パンナレッジ、二〇一七年六月参照

『増廣字便倭節用集悉改大全』 <http://hdl.handle.net/2309/105648>、東京学芸大学リポジトリ、二〇一七年六月参照

太陽コーパスCD-ROM版 国立国語研究所、二〇〇五
中央研究院漢籍電子文獻漢籍全文資料庫 <http://hanchi.hsinica.edu.tw/hp/hanji.htm>、台湾中央研究院、二〇一七年六月参照

東京大学史料編纂所データベース <http://www.wap.h.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller>、東京大学史料編纂所、二〇一七年六月
参照

北京大学中国語言学研究中心語料庫検索系統 <http://ccl.pku.edu>

cn:8080/ccl_corpus/index.jsp?dir=gudai' 北京大学中国语言学
研究中心、二〇一七年六月参照

明六雑誌コーパスCD-ROM版 国立国語研究所、二〇一七

読売新聞記事データベースヨミタス歴史館 [https://database.yomi](https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/)

[uri.co.jp/rekishikan/](https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/) 読売新聞、二〇一七年六月参照

和英語林集成デジタルアーカイブス [http://www.meijigakuin.ac](http://www.meijigakuin.ac.jp/ngda/wae/)

[jp/ngda/wae/](http://www.meijigakuin.ac.jp/ngda/wae/) 明治学院大学図書館、二〇一七年六月参照

HathiTrust Digital Library <https://www.hathitrust.org/>、二〇一七

年六月参照

Internet Archive <https://archive.org/>、二〇一七年六

月参照

SAT大正新脩大藏経テキストデータベース二〇一五版 [http://](http://21dtk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/satdb2015.php)

21dtk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/satdb2015.php 大藏経テキストデー

タベース研究会 (SAT)、二〇一七年六月参照

(すうぶんくん 大学院博士課程後期課程在学学生)